地中へ向かう想像力――「黄金虫」における場所／place

髙瀬　祐子

Imagination to Underground: Place in “The Gold Bug”

Yuko TAKASE

はじめに

近年、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)をめぐる研究書誌において、場所／place は注目すべきテーマの一つである。2018 年に地理学的・空間的文学研究(Geocriticism and Spatial Literary Studies)というシリーズの 1 冊として出版された『ポーと場所』(*Poe and Place*)という論集は、ポーと作品の舞台や彼が実際に住んだ場所などから、作品の再読を試みる非常に興味深い 1 冊であった。この論集において、ポーと場所は、ポーが実際に暮らし行ったことのある地理的な場所(Geographical Places)、実在しない想像上の場所(Imaginative Spaces)、ポーが足を運んだことはないが実在する場所(Imagining Spaces)等に分類され、ポーの場所に対する意識や感覚を様々な角度からあぶり出している。

スコット・ピープルズ(Scott Peeples)は、ポーの場所感覚について、様々な土地を転々としたポーは放浪者であり、短い生涯の中でどこか特定の場所に根をおろすことはなかったと指摘する(Peeples 5)。ポーにはホームと呼べるような場所はなく、短い期間暮らした場所が複数あると言った方がよいだろう。その一つに「黄金虫」(“The Gold Bug”)の舞台となったサウスカロライナ州サリバン島がある。先述した『ポーと場所』の中ではあまり取り上げられなかったが、おそらくそれは本作がポーの他の作品と比較して場所との関係性が大きく異なるからだと思われる。本作において、場所は作品の舞台として出来事が起こった空間というだけでなく、本作の大筋である「宝探し」という行為そのも

のが「場所探し」である。ルグランが発見した暗号とは財宝の場所を示す記号に他ならない。「黄金虫」とは、「場所」を探すために暗号を解読し、その「場所」を掘り起こして財宝を発見する、いわば場所物語である。

ポーがその舞台として選んだのは、1827 年 11 月からおよそ 1 年陸軍の兵士として駐屯したサリバン島である。19 世紀に活躍した作家の中で、ポーほど地下や地中に何かを埋めること、あるいは埋めたものを掘りおこすことに興味を持っていた作家はいないのではなかろうか。代表作「黒猫」(“The Black Cat”)では妻の死体は壁に埋められ、「早まった埋葬」(“Premature Burial”)や「息の喪失」(“Loss of Breath”)では、登場人物たちは生き埋めになる。その他にもポーが地下や地中を描いた作品は枚挙にいとまがない。

ケネス・シルバーマン(Kenneth Silverman)が、本作の財宝発掘の場面は死体の発掘を彷彿とさせると指摘するように、埋まっているものが人間ではないという違いはあるにせよ、「黄金虫」にも他の作品との類似性を十分に見ることができる(Silverman 208)。ポーは「ヴァルデマー氏の病症の真相」(“The Facts in the case of M. Valdemar”)で描いたように、人が死に腐敗していく様子に格段に興味を抱いていたことは知られている。一方で「黄金虫」において地中に埋まっているものは、海賊の埋めた金貨や宝石である。これらの財宝は長い間土に埋まっていても腐敗することはない。本稿では、地中に腐ることのない宝物が埋まっているという点を踏まえつつ、「黄金虫」における宝探しの手順を再考し、ポーの地中へと向かう想像力の行方と「場所」について考察したい。

1.ポーのサリバン島

「黄金虫」におけるサリバン島については、リリアン・ウェイスバーグ(Liliane Weissberg)の論文「黒、白、そして金」(“Black, White, and Gold”)に詳しい。ウェイスバーグによれば、サリバン島を含むチャールストンエリアは、奴隷貿易の重要な中心地であった。1700 年から植民地時代の終わりまでにアメリカ大陸にたどり着いたアフリカ人の約半分は、まずサリバン島に降り立った。1707 年にサリバン島には検疫所を意味するラザレットまたはペストハウスとして知られるレンガ造りの建物が建設され、伝染病に感染したアフリカ人たちがしばしこの建物に収容された (Weissberg 133)。サリバン島には、このような病を隔離した歴史がある。つまり、島という閉じられた空間に、病を内包していたのだ。加えて、アフリカ人を奴隷へ、人間を財産へとトランスフォームする空間でもあった。ポーがサリバン島に滞在していたのは、サウスカロライナ州が奴隷貿易を停止してから数十年後だが、ウェイスバーグは、「ムールトリー砦に滞在していた若い兵士であるポーは島の歴史について知っていたに違いない」と推察する(Weissberg 135)。

本作においても病やトランスフォームという要素を見ることができる。ウェイスバーグはルグランと彼に仕えるジュピターの関係にミンストレルショー的な伝統(the tradition of the minstrel show)を見てとり、ジュピターは白人の振る舞いを真似ていると指摘する（Weissberg 141）。トニ・モリソ

ンは『白さと想像力』(*Playing in the Dark*)の中で、ジュピターがルグランに鞭を振るうという場面は、「他者」化という文学上のテクニックを駆使したポー作品における失策だと位置付ける(Morrison 58)。同じ場面について、ウェイスバーグは「ジュピターはルグランに従順ではあるが、口では鞭打つと脅し、二人はお互いに依存しているのだ」と言う(Weissberg 147)。「ジュピターは立場を逆転させ、支配的な地位を確率」しようと試みたのである(Weissberg 148)。

ジュピターとルグランのこのような逆転の背景には、プロット上ではルグランが黄金虫に噛まれたことによる変化が関係している。ルグランは黄金虫に噛まれたことによって、その見た目や振る舞いが大きく変わってしまう。それは後に、本人の口から語り手に一泡吹かすための偽装であったと告白されるが、単なる偽装にしては手が混んでいる。例えば、ルグランからの手紙を読んだ語り手は「手紙の調子には、どことなく胸騒ぎを呼び起こすもの」があり、「文体そのものが具体的にルグラン自身のものとは異なっている」と感じる(Poe, "The Gold-Bug" 813)。加えて、久しぶりにルグランに対面した語り手は、彼の表情が「おぞましいほどに青ざめており、彫りの深い眼は自然ならざる輝きを帯びてらんらんと光っている」ことに気づく (Poe, "The Gold-Bug" 814)。ルグランのこのような変貌が、ウェイスバーグが指摘したジュピターの「鞭打ち」に関する発言を引き出したのは間違いない。

サリバン島でルグランに起こった変化は彼の見た目だけにとどまらない。ルグランは黄金虫が彼に財産をもたらしてくれると信じ、それは彼だけのものではなく、"family possessions"を復権させてくれるものだと言う(Poe, "The Gold-Bug" 815)。元々ユグノー派の出であるルグランは、度重なる不幸により没落し、ニューオリンズを離れサリバン島に居を構えるに至った経緯を持つ。黄金虫のもたらす財産によって裕福になれば、ルグランは再び優雅な有閑階級へと変貌することができる。人間が財産へとトランスフォームし、奴隷として売られるようになるサリバン島という空間において、ルグランにもまた財産をめぐる変化が起こるのである。

2.ポーと暗号

宝の在り処を示す暗号に話を移したい。「黄金虫」といえば、世界初の暗号小説として知られ、後の推理小説に大きな影響を与えたといわれる。アーサー・コナン・ドイルがシャーロック・ホームズシリーズの『踊る人形』において、その暗号解読方法を借用したことはあまりに有名である。そもそも暗号とは、文字記号から意味をはぎ取り、シニフィエを持たない単なる記号にしたものだ。暗号を解読する行為とは、意図的に意味をはぎ取られた記号を、再び読むことが可能なテクストに直すことに他ならない。そして、「黄金虫」においてその暗号が示すものは、宝の隠された「場所」である。

ポーは 1841 年に発表した「暗号論」の冒頭で以下のように書いている。

> As we can scarcely imagine a time when there did not exist a necessity, or at least a desire, of transmitting information from one individual to another, in such manner as to elude general comprehension; so we may well suppose the practice of writing in cipher to be of great antiquity. (Poe, "Cryptography" 260)

19 世紀だけでなく、大昔から暗号は必要不可欠であったはずだとポーは主張しており、その根底にあるのは人の“desire”だと指摘する[1]。また、江戸川乱歩はポーの「暗号論」に関して以下のように説明を加えている。

> 『暗号論』であるが、ポオはこの年彼の編輯(へんしゅう)する〈グレアム雑誌〉で、読者から難解な暗号を募り、これを解いて見せることをはじめた。ポオの推理マニアが暗号読解を楽しむと共に、これを雑誌の人気取りに利用したのである。数号に亙ってこれが続けられ、ポオはその悉く(ことごと)を解いたと誇称している。(江戸川 417-18)

乱歩が「雑誌の人気取りに利用した」と指摘するように、ポーは暗号とその解読が読者の購買欲を刺激する企画となり得ることを十分理解した上で、その「欲望」を利用している。それは、意味を剥ぎ取られた記号を、再び読解可能なテキスト化するという暗号解読行為そのものの商品化であり、雑誌という文字記号の連なりの商品価値を高めることにつながっている。

ポーは、文字記号がもともとの文字の示すシニフィエではない、もう一つのシニフィエを持つことを、「モルグ街の殺人」(“The Murders in the Rue Morgue”)ですでにデュパンに実践させている。デュパンは新聞という文字の集合から得られる表面的な情報の裏に、もう一つのシニフィエを読み取り、見事に犯人を導き出す。さらに自ら新聞広告を打つのだが、その目的は広告ではなく、オランウータンが真犯人だと知る船乗りが自分のアパートに来るように仕向けているのだ。

高山宏は「名探偵のあるべき性格造形」とは、「読みの困難なものを解読可能なものに、過剰な根茎(リゾーム)状の混沌を要するにテキストに変えていく能力の体現者」であると言う(47)。高山によれば、名探偵とは「記号論的なヒーロー」であり、推理小説とは「彼が一切を解読して世界をテクスト化していく経緯(ゆくたて)を描くメタ-テクスト」なのである(47)。ルグランは名探偵ではないが、本作を推理小説の傍系であるとすれば、暗号を解読する記号論的ヒーローを演じるのはルグランただ一人である。

3. ルグランの暗号解読

ルグランの暗号解読の過程を詳しく見てみたい。暗号は紙ではなく、羊皮紙に描かれている。ルグランは羊皮紙の「耐久性」と「永続性」に注目し、暗号は「意図的に耐久性のある羊皮紙に記録されたのだろう」と推測する(Poe, “The Gold-Bug” 831)。ルグランの羊皮紙を、本作の背景にあるアメリカの硬貨と紙幣をめぐる論争から考察してみたい。

本作には、1837 年の経済恐慌の影響が色濃く見られることは、すでに多くの批評家たちに指摘されている。マーク・シェル(Marc Shell)は、紙幣支持者たちは、貨幣支持者を指す“gold bugs”に対して“paper money men”と呼ばれ、紙幣論争とは「実質的なモノとそのモノが作り出す記号の関係に収斂する」と言う(Shell, *Money, Language, and Thought* 5-6)。シェルは、「正金の支持者たちは金に価値の実質を結びつけ、紙を「非実体的な」記号として蔑んだ(シェル『芸術と貨幣』92)」と指摘し、「紙の価値と紙幣の額面との間にほとんど何の関係もないことを、アメリカ人は重々承知していた」

（シェル『芸術と貨幣』93）と言う。この関係が見えないからこそ、物質そのものに価値のある貨幣を支持する“gold bugs”が生まれたのである。

このような硬貨と紙幣の論争の最中において、羊皮紙の特性は注目に値する。破れたり燃えたりする紙と異なり、羊皮紙は紙と同じように使用できるが鉱物と同じような耐久性を持つ。永続性や耐久性という観点から見れば、紙幣と硬貨の中間に位置している。さらに、ルグランが発見した羊皮紙には暗号が記されており、暗号を可視化するためには、熱を加える必要がある。この行程に関し、ルグランは金属の塊を意味する“regulus”という単語を用いて、金属を溶剤で溶かし熱を加えると文字が浮き上がると説明する(Poe, “The Gold-Bug” 832)。羊皮紙が担う紙と鉱物の間の中間領域的な役割は、金属を用いた化学変化を用いて暗号が書かれているという点において、ますます高まる。

硬貨と紙幣の論争とは、記号とモノの関係についての議論である。硬貨は硬貨そのものに価値を見出すことができるのに対し、紙幣はそのものに価値はなく、紙幣のみで裏打ちされているかを見分けるのは困難を極める。このような硬貨と紙幣の関係を、本作における羊皮紙と財宝の関係に当てはめてみると、硬貨のようにそのものに価値があるのは財宝であって、羊皮紙に価値はないはずである。しかし、そこに暗号が記されているとすればどうだろうか。財宝の場所を指し示すシニフィアンがなければ、財宝にたどり着くことはできない。よって、暗号というシニフィアンそのものに、一時的な価値が生じるのである。

ルグランは羊皮紙に暗号が記されているのを発見する前に、まず髑髏と小山羊という「記号」が羊皮紙に記されているのを見つけ、髑髏が海賊、そして小山羊が「キャプテン・キッド」を意味することに思い当たる。ルグランは髑髏とキッドが記された羊皮紙に、宝の埋蔵場所を示す記録 “a lost record of the place of deposit” があるはずだと確信めいた望みを抱き、その時のことを語り手に以下のように説明する。

> “But that Kidd’s accumulations were immense, is well known. I took it for. granted, therefore, that the earth still held them; and you will scarcely be surprised when I tell you that I felt a hope, nearly amounting to certainty, that the parchment so strangely found, involved a lost record of the place of deposit.” (Poe, “The Gold Bug” 834)

ルグランは、髑髏とキッドという記号が見つかったのに対して、宝の埋蔵場所を示す記録が見つからない状況に困惑し、“…I was sorely put out by the absence of all else—of the body to my imagined instrument—of the text for my context” (833)と言う。ここでルグランが言う “my imagined instrument”とは、宝の埋蔵場所を示すもののことである。しかし、宝の埋蔵場所を示すものの実体(the body)、すなわち「暗号」は、この時点ではまだ見つからず、そのことにルグランは困惑しているのだ。さらに、“the body”を“the text”と言い換えている。宝探しのコンテクストにおいて、暗号こそが実体であり、それはまたテキストでもある。ルグランの言葉により、単なる記号であるはずの暗号が、宝の埋蔵場所を示す重要な実体へと、さらにはテクストへと変換されている。

本作において羊皮紙は、その耐久性や永続性という点だけでなく、まさにシニフィアンとシニフィエの関係においても、中間領域的役割を果たしている。暗号が宝の在り処を示す場所を記録しているとわかった瞬間に、暗号の記された羊皮紙そのものが実体であり、価値あるテクストとなるのである。それは、紙に記された文字記号が、作品として立ち上がった時、はじめて価値あるテクストとなって、雑誌や本が売れる文学市場と同じ構図を成している。

4. 地中へ向かう想像力

ルグラン一行が発掘したお宝は、金貨、ダイヤモンド、ルビー、サファイヤなどの宝石類や黄金の装飾品など様々だが、特筆すべき点は、金属はすべて金だという点である。宝石類を含めても、財宝のほとんどは鉱物であり、地中のイメージがつきまとう。語り手は、お宝が入って埋められていた木製のチェストについて、以下のように描写している。

> During this interval we had fairly unearthed an oblong chest of wood, which, from its perfect preservation and wonderful hardness, had plainly been subjected to <u>some mineralizing process</u>—perhaps that of the Bi-chloride of Mercury. (Poe, "The Gold Bug" 825-26 emphasis mine)

木製の箱には地中に長く埋められていたことから、塩化水銀による"mineralizing process"、鉱化作用が起こっていると述べる。加えて、ポーは財宝を指す単語として"deposit"を使用している。"deposit"は現代では銀行等の預り金という意味が真っ先に浮かぶが、金や石炭などの埋蔵物という意味もある[2]。OED には、「黄金虫」が出版された 1843 年前後に"the deposit mines"や"the deposit gold"という形容詞的な使用例があるだけでなく、地中に埋まる鉱物を意味する"the mineral deposit"という使用例もある。ポーが財宝を意味して使用した"deposit"は、金や石炭などの鉱物を連想させる言葉なのである。

本作の中盤において、ルグランはジュピターをチャールストンに遣いに出し、そのついでに語り手に手紙を届けさせるのだが、お遣いの目的は"scythes"と"spades"を買うことである(Poe, "The Gold Bug" 814)[3]。さらに、ルグランの言葉には"mattock"も登場する(Poe, "The Gold Bug" 844)[4]。これらは地面に穴を掘るための道具だが、19 世紀中葉のアメリカにおいては石炭採掘を想起させる道具でもある。1830 年に石炭を燃料とするアメリカ最初の実用蒸気機関車が走ったのは、本作の舞台でもあるチャールストン、サウスカロライナ運河鉄道である。さらにポーが本作を執筆したフィラデルフィアの位置するペンシルベニア州は、19 世紀石炭採掘の中心地である。ピープルズは、フィラデルフィアは 1830 年代に石炭、蒸気、運河、鉄道に囲まれた工業都市となったと指摘する(Peeples, *The Man of the Crowd* 77)。当時のペンシルベニア州で発行された新聞には"coal"や"coal mines"といった炭鉱関連の言葉が数多く並び、フィラデルフィアで生活していたポーにとって、石炭は蒸気船や蒸気機関車として身近にあっただけでなく、炭鉱や坑夫たちに関する情報も日常的に目にしていたに

違いない。また、1844 年に発表した「軽気球夢譚」(“The Balloon-Hoax”)には石炭ガスを使用した気球が登場し、この気球はサリバン島に到着する。

本作が、他のポー作品における地中や地下の描き方と決定的に異なる点は、地下から金や宝石、つまり鉱物が見つかる点である。本作が発表された 1843 年頃、石炭を始めとする鉱物は、アメリカの工業化に欠かせない重要な地下資源であった。新聞などにおいて、“mineral”という単語は“wealth”と結びつき、「鉱物資源」を意味する“mineral wealth”として数多く使用されている[5]。鉱物は富をもたらすもの、あるいは富そのものとして、この２つの言葉が結びつくのは、決して偶然ではないだろう。

1830 年代から 40 年代にペンシルベニアで発行された新聞記事には“mineral wealth”という言葉を数多く見ることができる。急速に進められる鉄道建設を背景に、工業化が進み、マニフェストデスティニーのもとに拡張するアメリカ社会において、目に見えて広がる領土は、同時に地下にある目に見えない鉱物資源を取り込んでいくことを意味していた。

おわりに

「黄金虫」において、ルグランが暗号解読により地中にある富/wealth を手に入れる様は、ポーの地下・地中へ向かう尽きることのない想像力を予感させる。ルグランはキッドのお宝がまだ地中に埋まっているはずだと確信し次のように言う。“But that Kidd’s accumulations were immense, is well known. I took it for granted, therefore, that the earth still held <u>them</u>;…(Poe, “The Gold Bug” 834 emphasis mine）この“them”は財宝のことを指すが、ルグランのこの台詞はまるで地球に眠る地下資源のことを意味しているようではないだろうか。この文脈において“the earth”は地中という意味で使用されているのは明らかだが、一方で地球全体の地下に、まだ見えない富としての鉱物資源があることを予感させる。

ポーの時代、アメリカはマニフェスト・デスティニーを掲げ、その欲望は西へ西へと向かい地上を這うように領土を拡げていった。同時に、地上を横断する鉄道の運行には地下資源が必要だった。ルグランが見せる財宝への欲望は、アメリカが予感していた地下に眠る資源という宝に、人々が抱く飽くなき欲望を連想させるのである。本作出版から 16 年後、エドウィン・ドレーク(Edwin Drake)が、ポーが住んでいたフィラデルフィアと同じく、ペンシルベニア州タイタスビルで油田の掘削に成功し、世界的なエネルギー革命が起こる。現代においても、シェールガスやオイルサンドなどの地下資源をめぐり、地中へと向かう欲望は尽きることがない。ポーはこのような地下資源の未来すら予見していたのかもしれない。

注）

1 ポーの指摘通り、暗号とその解読は続く世界大戦においても非常に重要な役割を果たしている。アラン・チューリングは後のコンピューター科学に大きな影響を与える論文を執筆したことで知られているが、彼は第二次世界大戦中にドイツ海軍の暗号エニグマを解読する仕事に携わっていた。現代においてコンピューターのない世界が想像できないことを踏まえても、暗号によって限定的に情報を伝えたいという欲望と、それを解読したいという欲望は現代社会の根幹を築いたと言っても過言ではない。

2 OED では、名詞の deposit の第 3 義として以下のようにある。Something deposited, laid or thrown down; a mass or layer of matter that has subsided or been precipitated from a fluid medium, or has collected in one place by any natural process.

3 ジュピターと語り手は以下のような会話をする。

“Him de <u>syfe and de spade</u> what Massa Will sis pon my buying for him in de town, and de debbils own lot of money I had to gib for em.” “But what, in the name of all that is mysterious, is your ‘Massa Will’ going to do with <u>scythes and spades</u>?” (Poe, “The Gold Bug” 814 emphasis mine)

4 “mattock”の含まれる本文は以下の通りである。

…Perhaps a couple of blows with <u>a mattock</u> were sufficient, while his coadjutors were busy in the pit; perhaps it required a dozen—who shall tell?” (Poe, “The Gold Bug” 844 emphasis mine)

“mattock”は、宝探しの際に宝と共に発見された白骨についてルグランが推測する場面で登場する。ルグランはキッドが財宝を埋める際に、この秘密に加担した仲間をすべて殺してしまったのではないかと予想する。その際に、地面を掘るために持っていたつるはしで一、二発ぶちかましたのだろうと。

5 Library of Congress の新聞データベースで調べると、“mineral wealth”という語句のヒット数は 1830 年代から急激に増加する。1835 年から 39 年では 238 件だが、1840 年から 44 年では 581 件と 2 倍以上にはね上がる。さらに 1845 年から 49 年では 982 件ヒットする。“mineral resources”という語句も同様に 1830 年代から使用件数の上昇が顕著に見られる。このようなデータからもアメリカにおいて、1830 年頃から地下資源への注目、そして活用が飛躍的に伸びていることがわかる。

引用文献

Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination.* Vintage Books, 1993.

Peeples, Scott. ""No Direction Home": The Itinerant Life of Edgar Poe." *Poe and Place*, edited by Philip Edward Philips, Palgrave Macmillan, 2018, pp. 3-18.

---. *The Man of the Crowd: Edgar Allan Poe and the City*. Princeton UP, 2020.

Poe, Edgar Allan. "Cryptography." *The Works of Edgar Allan Poe — Vol. IX: Eureka & Misc*, edited by E. C. Stedman and G. E. Woodberry, Stone & Kimball, 1895, pp. 260-78. *The Edgar Allan Poe Society of Baltimore*, www.eapoe.org/works/stedwood/sw0900.htm.

---. "The Gold Bug." *Tales and Sketches, Volume 2: 1843-1849*, edited by Thomas Ollive Mabbott, U of Illinois P, 2000, pp. 806-47.

訳は巽孝之『モルグ街の殺人・黄金虫—ポー短編集 II ミステリ編—』新潮文庫を参照。

Shell, Mark. *Money, Language, and Thought*. U of California P, 1982.

Weissberg, Liliane. "Black, White, and Gold." *Romancing the Shadow: Poe and Race*, edited by J. Gerald Kennedy and Liliane Weissberg, Oxford UP, 2001, pp. 127-56.

江戸川乱歩「探偵作家としてのエドガー・ポオ」1949 年『ポオ小説全集 IV』東京創元社、1974 年。

高山宏『殺す・集める・読む—推理小説特殊講義』東京創元社、2002 年。

マーク・シェル『芸術と貨幣』小澤博訳、みすず書房、2004 年。